

■このコーナーを担当したのは、

おじま くにみつ はすぬま
小島 邦光さん（蓮沼）

目の不自由な人に愛の光を与えよう

『献眼』という言葉をご存知ですか。目の見えない人に角膜を提供することです。亡くなられた人から眼球を摘出して、アイバンク（眼球銀行）に提供し、角膜障害の人に移植するのです。提供された角膜は、片方ずつ2人に移植されるので、1人の善意が2人を助けることになります。一般にはまだあまり知られていない『献眼』について紹介します。

15歳以上なら誰でも提供できます

角膜は、眼球の最前部にある透明な組織です。病気や外傷で白く濁ってしまった角膜を透明な角膜と取り替える手術を、角膜移植と言います。角膜が透明であれば、白内障や視力障害があつたとしても、15歳以上なら誰でも献眼できます。角膜の寿命は120年と言われているので、80歳で摘出した角膜は移植して40年は使えることになります。現在、角膜疾患のために移植を心待ちにしている人は全国に約3,700人。それに対して献眼する人は毎年900人程度です。

献眼するためには、各県のアイバンクに登録をおきます。茨城県アイバンクの天野ミサ子さんは「現在の登録者は全国で140万人。県内では4万人が登録していますが、献眼する人は毎年20人ほどです。登録者数に対して献眼者が少ないのは、亡くなった時、家族が気が動転して献眼まで気が回らないということが考えられます。生前、多く

の方が病院やライオンズクラブなど第三者に献眼の意思表示をしていただければ、献眼者ほもつと増えると思います」と言います。

あなたの善意を待っている人がいる

3月11日、協和中央病院講堂で行われた『協和ライオンズクラブ結成30周年記念式典』（久野衛会長）の中で、小沢眼科内科病院（水戸市）の小沢忠彦院長による『角膜移植の現状』と題した講演がありました。この病院は、日本で最初に角膜移植を実施した病院です。

茨城県アイバンク常務理事でもある小沢先生は、「角膜は光を通して屈折させる重要な役割を持っています。目に異物が入ったらすぐに水で洗い、痛みを感じたら冷やしてください。これで角膜の疾患を減らせます。角膜疾患のほとんどは、角膜移植で治ります。移植を待っている人は提供者の何倍もいるので、提供者をもつと増さなければなりません。医師の立場から見ると、病院で亡くなる時に立ち会う医師の一言で献眼者は増えると思いま

す。県内の摘出手術指定医療機関は8つですが、さらに多くの病院の協力が得られればと願っています」とおっしゃっていました。先生は県内で2番目に多い移植手術を行っているので、その説明には迫力が感じられました。筑西市では、この2年間で5人から献眼があり、すべてライオンズクラブ関係者でした。今回の取材記事で多くの皆様に理解していただき、献眼が増えることを期待しています。



小沢院長にインタビューする小島記者（左）

■問い合わせ 茨城県アイバンク TEL 029-224-7007